はじめに

本誌は徳次郎石研究会（令和元（２０１９）年５月１５日発足）の、５年目にあたる令和４（２０２３）年度の活動成果について報告するものです。

この一年間は新型コロナ感染症でだいぶ影響をうけた日々でしたが５類感染症に移行したこともあって、従来の日々に少しずつが戻ってきています。この１月１日には能登半島で地震が発生して、大きな被害と犠牲が出て、支援や復旧の活動がまだまだ続いております。

徳次郎石研究会の本年度の活動を、以下に振り返えります。

会員各自の活動では、徳次郎石、長岡石、板橋石について、現地での採掘場跡、石材遺跡、関係資料の調査から得られた本県の石文化について、新たな成果の報告がなされています。板橋石の再調査に際しては、日光市郷土歴史研究家田邊博彬氏のご協力により、新たな採石場の跡や各種資料を確認することが出来ました。

本県の高遠石工の足跡については、これまで個々の資料によるのみでしたが、今回の調査で古賀志町における高遠石工の移住の実態が明らかになりました。これは、本県における高遠石工についての今後の調査研究に役立つものであります。

石文化の保存活動としては、石の竈につき２件、小山高等工業専門学校に教材用、宇都宮市上河内民俗資料館に各１台ずつ民俗資料として移管していただきました。これらは石の竈の所有者であった方々のご好意によるもので、厚く御礼を申し上げます。

大谷石についての失われた石造物の発掘と記録の状況、昭和３０年代の大谷石採掘の最盛期に建造された旧栃木会館の大谷石彫刻の芸術的価値について、詳細な紹介があります。今年度、日本遺産「大谷石文化」の構成文化財であった市中の青源味噌店の文庫・倉庫蔵、星が丘の坂道から宇都宮タワーを仰ぐ山木屋呉服店の大谷石の蔵からの景観などの多くが消失しました。これらは調査活動でわかった悲しい現実ですが、やむを得ない事情もありますが、保存活動に加えて、記録文献や写真などを残す活動も、本会から発信したいと考えます。

また、住宅地の長岡町にある隧道について、民放テレビ局が関心を持たれ、徳次郎石研究会の協力と紹介のもとに、この景観や由来などの石文化を全国に放送する機会がありました。今後も、こうした市中にある文化価値の高い石文化に関して物件や遺跡については、市民の皆様の情報提供をお願いしつつ、発見と保存に努めていきたいと思います。

さて、今年度の本会と他地域との交流活動として、『福島県県南狛犬ネットワーク』との８月７日に、交流会を栃木県の高遠石工の活動の関連で実施しました。隣接県白河市周辺地域における高遠石工、およびその系譜を引き継ぐ石工たちの足跡をこの目で実際に確認したいとしたものです。地元の高遠石工研究者等のご案内のもとで、芸術性の高い狛犬等を随所で見せていただきました。一人の石工の定住により独創的な狛犬の作品を生み出した地域社会については驚嘆の限りです。こうした芸術性の高い狛犬群の保存やそのための啓蒙活動は、日本の石文化についての保存・継承の今後の在り方にも影響を与える重要性があり、支援活動を行政と共に行う必要性を感じました。

富津市において、１０月２７日の「金谷石のまちシンポジウム」は、日本遺産候補地域認定記念事業として強力に推進されています。この金谷の採石事業では、昭和３０年代の機械化の導入の際に、大谷からの採石機の導入と指導の経緯があり、友好的な縁があります。今回の交流から、広く関東エリアに、こうした多くの石文化が残されていることを改めて知りました。昨今、全国的にも石文化の復活の輪が広がりつつあるなかで、こうした活動を支援する意義は大きいと感じられます。

令和５年度（２０２３）徳次郎石研究会の活動は以上の通りですが、来年度からは研究対象地域を徳次郎地域から県内全域と広げて、「野州石文化」と発展させて、調査・研究の活動に取り組んでいくことになりました。皆様方の本会へのなお一層のご支援を期待しております。

令和6(2024)年3月　　徳次郎石研究会　　代表幹事　中川　博夫･中村　洋一